

副詞句から接続詞句へ：en même temps の場合

新田直穂彦
(東北大学大学院)

同時性を表す *en même temps* は一般に副詞句として機能するが、文頭に置かれた場合は、前後の文を結合する接続詞句のような働きをする。本発表では、コーパスの分析に基づいて、*en même temps* の副詞句から接続詞句への変化について考察した。

コーパス(*Frantext*)によれば、*en même temps* は17世紀初頭から使用され始めた。文頭で用いられる割合は、17世紀から19世紀後半まで上昇し、それ以降は徐々に低下している。文中では接続詞句の機能を果たすことがないため、接続詞句としての使用頻度も低下していることになる。とはいえ、副詞句から接続詞句への変化は進行している。Overbeke(2007)が主張したように、文頭に置かれた場合、文中で用いられた場合と比較すると、同時性という意味が希薄化して対立を表すことが多くなる。ただし、コーパス(*Le Monde diplomatique*)の分析結果では、対立を表す頻度よりも、話題の変更や、対立していない内容の添加を表す頻度の方が高いことが確認された。同時性と対立とは近い関係にあり、*cependant*, *alors que* の場合は、同時性から対立の意味が生じた。これに対して、*en même temps* の場合は、同時性から対立以外の意味が生じており、同時性を表す副詞句から多義性を持つ接続詞句への変化が起きていると考えられる。